

「教師力」「人間力」を高める　　教師が育つ土壌づくり」

―中村 巽・前教育新聞社顧問回想―

平成二年、当時、県小中学校長会会長を拝命していた私に、柴田富信氏（豊田市教育長）、伊藤克己氏（東海市教育長）のお二人から「教育新聞三河支局」の開設を要請された。それまで名古屋・尾張の教員は教育新聞を「名古屋支局」から購読していた。この時点では三河の購読者は皆無であった。

相次ぐ教育改革が進む中、情報収集に努め、研究・修養に励むのが教師の本分である。そのために「三河支局」を創ろうと奔走する。

まずは、三河校長会に「支局開設」と「教育新聞購読」について諮問することとした。すると同校長会は支局の開設を承諾しただけでなく、同時に購読者の募集も郡市校長会で行うことを申し合わせていただいた。

・・・こうして教育新聞は、平成三年四月、教育愛知の現況を表す「愛知県版を創刊させると共に、三河部三百六十人を加えての新しいスタートを切ったのである。

さらに平成六年、三河支局を東西に分割し、平成八年には、「尾張支局」を開設することとした。かくて「教育新聞愛知支部」は、顧問、常任顧問、四支局長の六人態勢で進むこととした。

爾来、教育新聞は時を重ね、購読者に恵まれ、人を得て、愛知の教師の「学び場」として羽ばたいていったのである・・・

―教育新聞愛知県版の意義―

『教育新聞愛知県版』は、愛知県教育委員会、県並びに名古屋・三河・尾張三地域の校長会、加えて都市区並びに町村教育長協議会等のご尽力をいただき、『愛知の教育の羅針盤』（今井秀明元愛知県教育長「提言」）として教師力・学校力の向上に寄与してきた。

県下の学校・教師等から寄せられる玉稿は、その時々々の教育課題に敢然と挑んだものであり、言ってみれば愛知県版は購読者によって育てられてきたのである。

それ故、平成二十二年、『愛知県版』は、愛知の義務教育の貴重な資料として、「愛知県公文書館」に収蔵されることとなった。



A 校長曰く、「若手教師への指導場面で『教師は時として役者でありたい』と、説いた。それには、何としても多様な情報を選択して、多彩な言語を駆使する才知が必要である。そのため、事ある毎に『本を読め』『新聞を読め』と激励した。その意味で教育新聞は指導における重要な素材そのものであった。

また、管理職任用や教員採用準備においても参考となり、教育に関する様々なニュースを『校長通信』にも再三引用させていたいただいた」。

『教育新聞』は、これまで育ちゆく教師に相応の情報を発信し、研究・修養に努めていただくことを願いとしてきた。

とりわけ、『愛知県版』は、県内の教育行事、教育実践、読者の声、教育センター情報などを充実させ、「愛知の教育の―今―」を象徴してきた。

教育新聞は、『教師が育つ土壌づくり』に向けて三十年目を迎えている。
今後とも教育新聞に変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げる次第です。